

令和 7 年

理 事 長 挨拶

塩原カントリークラブ
理事長 渡邊 勇雄



新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様におかれましては良いお年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

旧年中は格別のご愛顧を賜り、誠にありがとうございました。

昨年度は関東女子倶楽部対抗栃木予選大会が開催され盛会のうちに幕を閉じました。

関東倶楽部対抗男子におきましては、決勝大会進出を果たし第7位という結果となり、栃木県知事盃においてはグランドシニアの部・ミッドクイーンズの部・一般男子の部 3 部門の優勝、更に栃木県アマチュア選手権の優勝という輝かしい結果となりました。おめでとうございます。

当クラブの 4 大競技の 1 つシニア選手権も、6 年ぶりに開催することが出来ました。会員の皆様のご協力心より感謝申し上げます。

マスター室では昨年 7 月から待望のカーナビが導入され、遅延プレー防止や打ち込み防止更に雷接近時の警報など安全面が強化されました。会員の皆様におかれましては、ご家族・ご友人をお誘い合せの上、ご来場戴きますよう宜しくお願い申し上げます。

末筆となりましたが、会員の皆様とご家族のご健康、ご繁栄を祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。



松枯れ続く。今冬も約400本を伐採処理。

松食い虫の被害による松枯れが続き、今冬も伐採処理した赤松は400本にのぼっている。現在でも伐採の必要があるものが30～40本にのぼり、伐採後の枯れ枝がコース脇に残っている所もあり、プレー中の注意を呼びかけている。

残っている枯れ松の中には、クラブハウスやコース周辺の民家との位置関係で、コース管理部門が処理するには危険が伴い、専門業者に依頼しなければならないものもあり、枯れ松の処理に当分悩まされそう。枯れ松を伐採したため、隣接ホールとの遮蔽物がなくなり、ボールが飛び込みや少なくなったところもあり、この対応にも頭を痛めている。

開場記念祭は2日間。

公式競技は第60回県知事盃一般女子・ミッドクイーンズ決勝を開催。

毎年4月に開催される開場記念感謝祭だが、昨年は2日間の開催としたのが好評だったため、今年も4月11日(土)、12(日)の2日間にわたって開催される。いずれも9ホール、新ペリア方式。

また、公式競技大会は県知事盃ミッドクイーンズ決勝の開催が予定されている。

Web会報「塩原」を模様替え。

小笠原理事のコラム欄、中里プロのQ&Aを新設。

塩原カントリークラブに関する情報を発信しているWeb会報「塩原」では、内容を充実させてメンバー、ビジターの別なく皆さんに親しんでもらうため、今回の年初号から内容を模様替えした。

そのひとつは、昨年秋に塩原カントリークラブ理事に加わっていただいた、小笠原勝さん(前宇都宮大学教授)によるコラム「雑草博士のグリーン談義」の新設。小笠原理事は1956年、秋田県生まれ、1978年、宇都宮大学農学部卒、民間会社を経て同大に。農学博士、日本芝草学会会長、日本雑草学会評議員、宇都宮大学雑草と里山の科学教育センター教授などを歴任。

道路、河川、公園、芝地、メガソーラ発電施設などを対象とした植生制御、雑草管理技術についての第一任者。著書に「雑草害」(幻冬舎新書)がある。小笠原氏は古くからの塩カンメンバーでエコロジー専門家によるグリーン談義は、大いに興味がそそられる。

「プロの目Q&A」は、塩カン所属の中里鉄也プロによるコース紹介が全ホール終了したのに続く新連載。昨年の県プロ選手権第4位の実績を誇るプロに、ゴルフの奥義を知るための質問をぶつけ、アドバイスをいただくという企画。初回はプロ野球人でもあったという自己紹介と塩カンのコース魅力などからうかがおう。



ゴルフ愛はシングル、知見は塩カンのために

この度、塩原カントリークラブ理事を仰せつかりました小笠原でございます。秋田県出身で現在、宇都宮市に在住しており、この4月に69歳になります。ゴルフの腕は全くダメですが、ゴルフ愛だけはシングル級と自負しております。気心の知れた仲間と青空の下でゴルフをする度に感謝の気持ちでいっぱいになりますが、その一方で、ゴルフ三昧の生活に多少の後ろめたさがあるのか、社会のさまざまな出来事にも無関心でいられなくなってしまいます。連日のように、少子高齢化、地域振興、生態系保全に関するニュースがテレビや新聞で報道されています。考えてみれば、これらの将来、起こりうる社会問題のいずれもがゴルフ場と直接的あるいは間接的に関わっていることが分かります。それ故に、従来の行政主導型の課題解決と一線を画した地域に密着したゴルフ場ならではのユニークな取り組みが期待されます。ゴルフ場のあるべき姿は会員だけでなく地域社会としても、必要不可欠な存在になることであり、これがまさにゴルフ場がカントリークラブと呼ばれる所以かと思えます。3年前に現役をリタイアしましたが、それまで宇都宮大学で除草剤に関する研究に携わっておりました。もしかしたら、芝生管理の点で、少しはお役に立てることがあるやもしれません。会員の皆様のご指導を頂きながら、歴史のある塩原カントリークラブが会員はもとより地域の皆さんに、より一層、愛されるように、微力ながらお役に立てればと思っております。簡単ですが、理事就任のご挨拶とさせていただきます。



(H29 年入会時の写真)





中里プロのプロフィール紹介

中里 鉄也（1975 年 5 月 23 日生）

栃木県佐野市出身の元プロ野球選手。

葛生高等学校(現:青藍泰斗高等学校)出身。

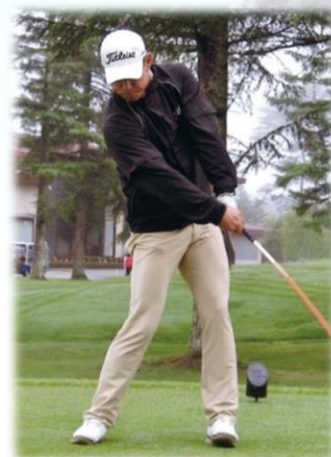
高校 3 年生の夏、全国高等学校野球選手権栃木大会で決勝に進出するが惜しくも敗退。

1993 年のドラフト会議にて阪神タイガースから 4 位指名を受け入団。

1999 年に退団し、その後現役を引退。

引退後は地元を拠点にプロゴルファーとして活躍。

2009 年から塩原カントリークラブに所属。



中里プロの Q&A

Q:好きなコース・素敵なコースは？

A:好きで素敵だったコースは、各コース 5 番ホール！

南北中の各 5 番ホールは、かつては多くのゴルファーを魅了する美しいコースでしたが、近年、松枯れ病の被害が深刻化し、コースの景観が大きく変わってしまいました。

特に、セカンド地点からグリーン周りにかけての 360 度、40 ヤード以内にある枯れ松の伐採は、コースの美しさを大きく損なう要因となっています。

かつての美しい景観を知るゴルファーからは、その変わり果てた姿を嘆く声が上がっています。ゴルフ場側も、この状況を改善すべく、様々な対策を講じていますが、抜本的な解決には至っていません。かつての美しい姿を取り戻すために、フロントにて『松の木募金』を行っておりますので、皆様のご協力を宜しくお願い致します。



那須の小天狗—小針春芳伝 28

井上安正

那須ゴルフ倶楽部のメンバーや栃木県内外の若手プロで、小針春芳がシニア入りの頃には、「小針プロ」と呼ぶ人はいなくなり、「小針先生」が通り名になった。だからと言って、小針の謙虚で控え目な態度に変わることはなかった。塩原カントリークラブで長く所属プロを勤めた鹿毛隆男の証言がある。

栃木、茨城、千葉県内のプロが集まって、毎月開かれた月例競技の時、小針が色弱で車の免許を持ってないのを知っていた鹿毛は、小針の送り迎えを買って出ていた。道中の小針の何気ない話しが、鹿毛にとっては勉強になった。

ところが、待ち合わせ場所は決まって高速道路の那須インター料金所の入り口とされ、帰りに降りるのもそこ決まっていた。「那須(那須カントリー倶楽部)か家(自宅)まで送りますと言っても、『ここでいいから』と受けなかった」と言う。倶楽部に連絡して誰かを迎え来させたと聞いたこともなかった。そこからは、自前で帰って行った。「そのことだけで、先生の人柄がわかるでしょう」という。

ゴルフのプロとはどうあらねばならないか。小針がこう語ったことがある。「精進してアマがあこがれる飛距離、アマが出来ないショットを見せるのがプロ。夢を提供するのだから、一打一打に一喜一憂してはいけない。ボギーをたたいたからといって、不機嫌な態度を見せてはいけない。すべて自分が悪いのだから、クラブをたたきつけたくなっても……。そんな時は自分の足をたたきなさい」と。ゴルフ場に足を運んだり、テレビ観戦したりするファン、お金を出してくれるスポンサー、二、三年がかりで整備してくれる開催コースの人たち。プロは感謝を忘れていけないと念を押した。

江場は小針のこんなつぶやきを聞いたことがある。

「ワイは人間が嫌いなんだ。とくに、えらい人はね」

江場はゴルフに注いだ情熱の裏返しだけではない、特別なものを感じた。ゴルフ誌に連載していた「小春日和」では、人間嫌いの人が発想しようもない興味深い企画を重ねて、素顔の「小針春芳」を偲ばせてくれた。

八十一歳の時、日本シニアオープンを観戦し、そのルポを載せた。誌上観戦記である。青木功がめざとく小針を見つけ、「先生」と声高に呼んで駆け寄ってきた。小針は言葉少なにほほえんで、互いに背に手を回して久しぶりの再会を喜び合っていた。

日本オープンで初優勝した愛知カントリー倶楽部東山コースを再訪したのは八十四歳の時だった。四十八年前の自分の試合の時にバックをかついでくれたキャディーに再会するため消息を尋ね回った。残念ながら長い年月の積み重ねの前に、それはかなわなかった。同じ年、幼少から自分を見守ってくれた茶臼岳に登って、頂上でドライバーを振ってみた。眼下に広がる那須ゴルフ倶楽部のコースに向かってこうもらした。

「いつか、ここから実際にボールを打ってみたい」

「小天狗」とも呼ばれた茶臼岳の頂上から、「小天狗」がドライバーを放つ。「人間嫌い」がこんなことは思い出すことはなかろうし、口にするはずはない。ましてや、日本オープン選手権の優勝の際には、わざわざ自転車のペダルをこいで、優勝トロフィーを幼なじみに見せて回った人がだ。



人前には出たがらず、傲り、吹聴することはなく、律儀にして謙虚そのものだった。取材の中で、小針の人柄について、あげつらう言葉を聞いたことは一度もなかった。「何故なのか」と幾度も自問してたどり着いたのは、ニューギニアでの過酷な戦場体験と那須ゴルフ倶楽部での大岡昇平との出会いであったろうという確信だった。あらためて紹介するまでもなく、大岡はフランス文学者であり、自らの従軍体験をもとに、戦争文学の最高峰ともいべき「俘虜記」「野火」などの作品を残した。

死に残り

ゴルフのハンディ22が最高で、「ゴルフの本ばかり読んで、「セオリーにうるさい割にうまくはない」という文士仲間の揶揄を甘受した。文壇ゴルフのメンバーが那須ゴルフ倶楽部のラウンドの後で集った、あの「樵小屋」の常連だった。文壇屈指のゴルフ論の大家は、後に「アマチュアゴルフ」というタイトルの“ゴルフ指南書”を出して好評を博している。

「俘虜記」は一九四四(昭和一九)年に三十五歳で召集、三か月の訓練を受けただけで、フィリピンに送られ、翌年、ミンドロ島でアメリカ軍の捕虜となった補充兵の戦場と捕虜体験が描かれている。戦争の悲惨さだけでなく、人間のエゴイズムをリアルに浮き彫りにしている。大岡はこの作品について、「自分が体験した戦場の悲惨、俘虜収容所で見聞した事実を借りて占領下の社会を風刺した」とあとがきに書いている。

「野火」は太平洋戦争末期のフィリピン戦線のレイテ島が舞台。主人公の日本兵士が結核を患い、部隊を追われて野戦病院へ送られる。しかし、食料不足から入院を拒まれ、飢えと闘いながら熱帯の山野をさまよう。孤独、殺人、人肉食への欲求。同胞を殺して生きようとする戦友たちを目にして、精神に異常をきたして行く。大岡は「これは俘虜記の補遺のつもりで書いた。俘虜記はドキュメントだが描き切れないものがあつた。フィクションという形で埋め合わせたのが野火です」と自作について語っている。「野火」は戦争文学の領域を超えて、人間の本質を衝いているとして高い評価を受けた。

文壇ゴルフ・PGAの春の例会やプライベートなラウンドの際に、小針は大岡と会話する機会を幾度となく持ったはずだ。大岡はゴルフの練習について、「プロについて教わる必要はない。だが、自分のフォームが何かおかしいと感じたらプロに診断してもらおう」が持論だった。また、「ゴルフはクラブフェースをアドレスした所へ戻しボールに当てて飛ばす。ただそれだけ」というゴルフ観が小針のゴルフ論と相通じるものがある。

そして、二人を近づかせたのは、大岡は暗号解読、小針は無線士と専門分野は違ったが、同じ通信兵だったことが手伝っただろう。戦場体験を互いに語り合うところを見たという証言はないが、小針が大岡の戦歴を知り作品を読んだに違いない。「俘虜記」「野火」に描かれている兵士の彷徨は、ニューギニアで小針が送った敗走の日々と二重写しになって迫って来たに違いない。

歩兵二三九連隊(宇都宮)に入隊した小針は、第二三八連隊(高崎)、二三七連隊(水戸)を中心に編成された第一軍指揮下の第四十一師団の主力として、山西省の警備や治安作戦の任務についていた。南方でフィリピン奪還のために大攻勢に出たアメリカ、オーストラリアなどの連合軍を阻止するため、第十八軍が新たに編成され、小針の四十一師団はそれに編入された。一九四二(昭和一七)年十一月にニューギニアへの転用が決まり、一九四三(昭和一八)年二月に、先発隊として、東部ニューギニアのウエワクに進出、五月に後続の本隊と合流した。



東部ニューギニアに散開していた全軍にウエワク集結命令が下され、一九四四(昭和一九)年七月、連合軍の拠点だったアイタペへの総攻撃が敢行された。当時、制空権は完全に連合軍の手中にあり、暗号電報も傍受され、すべて解読され、連合軍は小針らの行動を逐一把握されていた。結局、日本軍は敗走しアレキサンダー山系にこもって、飢餓とマラリアなどの病気が最大の敵となった。その年の後半には連合軍は、飛び石作戦でフィリピン侵攻に専従したアメリカ軍からオーストラリア軍が地上戦を引き継ぎ、徹底的な掃討作戦を展開した。

この間、一九四四(昭和一九)年十二月に「友軍兵の人肉を食することを罰する」との布告が出され、これに反した四人が処刑された。一九四五(昭和二〇)年五月には、二三九連隊の四十二人がオーストラリア軍に集団投降するなど惨状を極めた。第四十一師団約二万人の師団編成は一千人前後となり、九月末には食料、医薬品は底を尽き、年末には武器もなくなると予想された。七月には日本軍としては異例の実質的な玉砕命令が出されるに至った。

こうした状況の中で終戦の詔勅が届いて、九月十三日に第十八軍が降伏宣言を出し、武装解除の後、ウエワク沖合のムッシュ島の捕虜収容所に一万一千百九十七人の将兵が収容された。東部ニューギニア戦線の惨状に対する配慮から、政府は復員船を優先的に送り、一九四六(昭和二一)年一月末までに幅員を完了した。

(つづく)

編集後記

能登半島地震に見舞われた去年とは違って、今年は静かな年明けだった。しかし、三ヶ日が終わってから、那須塩原地方は雪に見舞われ、キャンセルが相次ぎ歓迎うれしくない年初となった。1月下旬になって、連日、「平年の3月並みの気温」という予報が出され、本格的なゴルフシーズンも早めに来るのではないかと、そわそわしだした。プロゴルフに転じれば、松山英樹がアメリカトーナメントで早々に1勝し、アメリカを目指す女子プロも元気で、楽しみな年になりそう。塩カンも全世代型のゴルフコースとして、親しみを増し続けるよう切に願っている。

井上安正